様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３３２０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５１００１６

研究課題名（和文）介護者のケアマネジメントにおけるアセスメントツールの開発

研究課題名（英文）Development of a new assessment tool for care management of family caregivers

研究代表者
相山　馨（AIYAMA, KAORI）

富山国際大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：１０５８２６２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：　介護者を要介護者とは違う独自のニーズをもつ個人として捉え、適切に支援するための介護者のケアマネジメントを展開するアセスメントツールの開発を試みた。ツールの実践試行をもとに改良を加え、居宅介護支援事業者と地域包括支援センターでの活用方法や連携システムを提案した。ケアマネジメント実践を通して、介護者の介護疲れや社会的孤立等のリスクを早期に発見し、介護者の個別ニーズを捉えるアセスメントツールの必要性が確認された。

研究成果の概要（英文）：This study treats family caregivers as individuals with their own unique needs that are different from those of care recipients and represents an attempt to develop an assessment tool for expanding care management to provide appropriate support for family caregivers. Improvements were made based on the tool's trial implementation; further, a utilization method and a cooperation system were proposed for use with in-home care support providers and community general support centers. The results confirm the needs to identify risks to family caregivers, such as nursing fatigue and social isolation, at an early stage through care management practice and develop an assessment tool that captures family caregivers' individual needs.

研究分野：ケア学

キーワード：ケアマネジメント　介護者支援　アセスメントツール

１．研究開始当初の背景

わが国では、諸外国にも例のない速さで高齢化が進み、2012 年７月現在の要介護（要支援）認定者の数は 540 万人を超え、今後も急増することが予想されている。こうして高齢化が進み、要介護者が増加していく中、介護者の負担は重く、その実態は非常に深刻である。昨今、現実として起こっている介護者による高齢者虐待、介護自殺、介護殺人といった悲劇は「尊厳」を重視するケアの現場にはあってはならないことであり、これらの課題の解決は急務である。

研究開始当初、介護者へのケアは要介護者へのケアに付随するものとして、ケアマネジメントの中に位置づけられていた。しかし、介護者は要介護者とは違う独自のニーズをもつ個人であり、介護者の悲劇をなくすためには、介護者への適切なケア実践が必要である。そして、その実践には要介護者とは別に介護者自身を対象にしたケアマネジメントを展開することが不可欠であると考えられる。これまで、介護者支援に関する研究も進められ、介護者ストレスの要因分析、認知症の家族支援の検討、高齢者虐待の早期発見チェックリスト、指標等が作成されていた。しかし、介護者のケアマネジメントにおけるアセスメントツールに関する研究はほとんど見られず、介護者を適切に支援するためのアセスメントツールとそのツールを活用するためのシステムが必要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究の目的は介護者へのケアマネジメントを展開するためのアセスメントツールを開発するとともに、そのツールを効果的に活用する方法や活用システムを定式化することである。アセスメントツールは介護者の介護疲れ等のリスクを早期に発見するとともに、その生活全体を捉えてニーズを明確化し、介護者を的確に支援するための展開ツールである。また、開発したツールをケアマネジメント過程に沿って実践・評価し、効果的に活用する方法や活用システムを提案することを目的とする。

３．研究の方法

（１）高齢者虐待、介護自殺、介護殺人の背景・要因について文献・資料を調査した。

（２）文献調査、要介護者（要介護１～５）を在宅で介護している介護者（３県 11 市町村 15 名）へのヒアリングによってニーズを把握した。

（３）ケアマネジメントに関わる経験年数５年以上の保健・医療・福祉の専門職（３県 10 市町村 10 名）が実践している介護者への支援に関するインタビューを行い、アセスメントツールに必要な内容について検討した。人の生活全体をとらえる生活エコシステムの枠組みをもとに（１）（２）（３）から、アセスメントツールの項目・構成について検討し、原案を作成した。作成したアセスメントツールの原案に関する構成・項目についての検討にあたっては、経験年数５年以上の保健・医療・福祉のケアマネジメント実践者を中心に、会議により検討し改良した。さらに、そのアセスメントツールをケアマネジメントに関わる保健・医療・福祉・司法等の学識経験者等により検討し、構成や項目について精査して介護者のアセスメントツールを作成した。その後、完成した介護者のアセスメントツールを実践試行（３県 11 市町村 17 事例）した。介護者のスクリーニングシートは居宅介護支援事業所のケアマネジャーが行い、介護者のアセスメントシートは地域包括支援センターが実践試行した。試行後、シートの構成や項目について精査し、「介護者のアセスメントツール第１版」を作成した。また、活用方法や活用システムについて検討し、その活用マニュアルを作成した。平成 27 年度には、「介護者のアセスメントツール第１版」を実践活用し、スクリーニング、アセスメント、プランニング（ケア会議）、ケアの実施、モニタリングまでのケアマネジメントを展開（３県 12 市町村 18 事例）し、活用システムの定式化を目指した。

４．研究成果

（１）介護者ケアマネジメントアセスメントツールの作成

介護者へのヒアリングの結果、介護者の介護負担としては「排泄介助の負担」「認知症への対応の困難さ」「夜間の介護と睡眠不足」「介護者自身の体調不調」「経済面の不安」や「今後の介護に対する不安」等があげられた。また、介護者は介護により「趣味や旅行が制限」され、それが地域でのつながりを途絶えさせ、孤立感を生み出す要因になっていることが明らかになった。介護者の介護負担には「排泄介助」「夜間の介助」が大きく影響していた。「介護をやめたい・したくない」と思った時の状況」では「便で部屋が汚れた時」「下着や衣類についた便を処理する時」「要介護者が下痢の時」等排泄介助に関するものが多かった。便でオムツ以外が汚れることにより、介護の負担感が一層増大し、介護への限界を実感することにつながるものと考えられる。また、介護者の睡眠不足は身体的・精神的疲労につながり、介護疲れを生じさせていた。介護者はこれまで介護に従事した経験があるわけではなく、はじめての介護であることが多い。効果的に支援するには介護者の介護負担を軽減する身体介護・認知症介護の技術を獲得するための指導・助言が必要である。また、介護者の趣味や旅行が制限されることが介護者のこれまでの社会とのつながりを途切れさせてしまう要因となり、孤立感を感じさせることが明確になった。介護者も要介護者と同様に、自分らしく生きることをあきらめることなく地域生活を送ることを可能にするような支援を実現してい

く必要がある。
　ケアマネジャーのインタビューからは支援過程において、困難が生じた局面での支援内容としては、「介護者の訴えを傾聴する」「介護者の思いを受け止める」「介護者の介護を認める」「介護者を理解する」「介護者を孤独にさせない」「サブ介護者との介護の分担を把握する」等の視点が必要であるということが明確になった。先行研究による基礎研究と本調査の結果をふまえ、介護者の生活全体をとらえるツールを構成するとともに、検討会や実践試行によって項目等を精査し、ツールを作成した。
　このツールは、「スクリーニングシート」と「アセスメントシート」により構成した。「スクリーニングシート」は介護疲れ等が生じている介護者、またはその可能性が高いと考えられる介護者を対象に、居宅介護支援事業所のケアマネジャーが記入する。このシートは介護者の状況と要介護者の状況、介護者の介護疲れを引き起こす要因について把握し、介護者のニーズやリスクを発見することをねらいとした。また、「アセスメントシート」は地域包括支援センターが介護者との面接により情報を収集し、記入する。このシートは、介護者に最も影響を与える「要介護者の状況」、実際に行っている「要介護者に対する介護」「家事」、介護者のその人らしさを捉える「介護者の特性」、介護者が抱えている問題を捉える「介護の問題」、介護者の介護に大きな影響をもたらす「家族」、インフォーマル・フォーマルな社会資源との関わりやつながりを把握する「地域（資源・ネットワーク）」により構成した。シートの項目に沿いながら、介護者固有の生活全体を捉え、介護者のその人らしい生活を支援するためのプランニングへの手がかりを得られるように検討を重ねた。
（２）アセスメントツールの活用方法と活用性
　作成した「介護者ケアマネジメントアセスメントツール第１版」を活用し、在宅介護のケアマネジメント過程に沿って展開し活用方法や活用性を検討した。全体の流れとしては、まず介護者の最も身近な存在であり、介護者の生活状況やその変化を捉えることができる居宅介護支援事業所が「介護者のスクリーニングシート」を活用し、そのシートによって介護者支援が必要かどうかをスクリーニングする。支援対象となった場合はその情報を地域包括支援センターに提供し、地域包括支援センターが「介護者のアセスメントシート」を活用し、その介護者の生活ニーズを明確にする。その後、そのニーズを解決するために支援計画をプランニングし、ケア会議(地域ケア会議等)で支援内容を検討し、支援計画を決定する。そして、支援計画に沿ってそれぞれが支援を開始し、モニタリングするという一連のケアマネジメントを展開する。アセスメントツールを活用したケアマネジメント実践と実践後のヒアリング調査を行った結果、明らかになったこととして以下の点があげられる。
　スクリーニングの局面ではツールを活用することによって、これまでの関わりではみえなかった介護者の生活ニーズを具体的に捉えることができること、介護者を要介護者とは別の生活ニーズをもつ個人として捉えることが大切であること等のあらたな気づきを得られたことがあげられる。
　また、アセスメントの局面では、介護者固有の生活を全体的に把握することが可能になること、その生活の中で生じる介護者の生活ニーズにも個別性があり、具体化することが重要であること、介護者の生活ニーズから地域課題が見えてくること等への気づきがあげられる。アセスメントシートを活用することによって、介護者のストレングスに気づくとともに、地域の社会資源を発見できたという事例もある。プランニングにおいては、介護者の生活ニーズの支援に関わる人の役割が明確化されたこと、以前よりも多様な地域の社会資源を活用した支援計画を立案することができたこと、住民への介護者支援に向けての意識啓発の必要性に気づいたこと等のケアマネジメント実践者の視点に変化が生じたことがあげられる。また、介護者が介護予防の対象であることがわかり、予防のサービスを開始することになった事例もある。
　面接時の介護者は、積極的に話したり過去からの話をしたりと普段よりも主体的に面接に参加する様子であった。介護者にとっては自分の介護のつらさや大変さを聴いてもらうことで不安が軽減し、気持ちが楽になるだけではなく、言葉にすることで自身の思いや困っていることについて気づく様子もあった。介護者は自分の介護に対して「認めてもらいたい」「労ってもらいたい」という気持ちをもっていることを捉えることができた。地域ケア会議における検討会は、介護者の介護の苦労を多職種が理解することにつながること、それぞれの情報から介護者の地域生活全体を捉えることができること、介護者がその地域の生活者であることから地域課題を捉える場となって効果的な地域の社会資源の発見につながることが明確になった。これは実際に展開された支援計画にも表れており、介護者教室、介護者交流会、オレンジサロン、いきいきサロン、民生委員、町内会長、班長、近所の人、友人、趣味の会の仲間、老人会のリーダー、食生活改善推進委員、コンビニの店員、スーパーの店員、ドラックストアの店員、ケアネット関係者、介護ボランティア、ヘルパー養成講座等、地域の社会資源を支援に活用していることが特徴としてあげられる。
　モニタリングでは、介護で困っていたことが解消されることにより介護負担が軽減したこと、不安が軽減したことにより精神的に

安定し穏やかになったこと、孤立感が解消されたこと、あきらめていた趣味活動や人との交流等に取り組めたり、外出の機会が増えたりしたことにより前向きになったこと、介護者が自身の健康等を気遣うことができるようになったこと等、どの事例もよい状況に変化していた。このアセスメントツールの活用は、介護者の生活全体からニーズを捉えられたこと、多様な地域の社会資源を発見できたこと等、介護者の地域生活の支援に有用であるという調査結果が得られた。また、このツールを活用したケアマネジメント実践は介護者の個別ニーズに早期に対応し、介護疲れや社会的孤立の未然防止等に効果的であるという結果が確認された。

（３）活用システムの定式化

活用実践の結果、このアセスメントツールはケアマネジメント実践者に介護者を個別事例として捉える視点をもたらすものであることが明らかになった。介護者のケアマネジメントは居宅介護支援事業所から地域包括支援センターにケース紹介されることから開始され、アセスメントの結果、包括的・継続的ケアマネジメント事業として関わる場合、権利擁護事業、介護予防ケアマネジメント事業、総合相談支援事業として関わる場合がある。また、地域ケア会議で支援内容を検討することにより、新たな地域課題や地域資源を発見することが可能になった。今後は実践活用の積み上げと研究協力者や活用したケアマネジメント実践者からのフィードバックによりシステム構築に向けた継続研究を進めていきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①相山馨「認知症介護における介護者支援方法の検討」富山国際大学子ども育成学部紀要第７巻、査読無、2016 年、pp.209-231

②相山馨「介護者のケアマネジメントにおけるアセスメントツールの検討」地域ケアリング 17（10）、査読無、2015 年、pp.84-89

③相山馨「ケアマネジメント実践における介護者支援」富山国際大学子ども育成学部紀要第６巻、査読無、2015 年、pp.1-12

④相山馨「ケアマネジメント研修における『地域包括ケア実践シート』の活用性」富山国際大学子ども育成学部紀要第５巻、査読無、2015 年、pp.1-12

⑤相山馨「ケアマネジメント実践者による高齢者虐待対応の現状と今後の課題:早期発見・早期対応を目指して」高齢者虐待防止研究９（１）、査読有、日本高齢者虐待防止学会、2013、pp.114-127

〔学会発表〕（計３件）

①相山馨「在宅介護における介護負担と介護者ニーズの実態」日本高齢者虐待防止学会 2015年7月11日、京都ノートルダム女子大学

②相山馨「ケアマネジメント研修における『地域包括ケア実践シート』の活用性」日本ケアマネジメント学会、2014 年 7 月 20 日、三条商工会議所会館

③相山馨「地域包括ケア実践のためのアセスメントシートの開発と活用実践の効果」日本社会福祉士会社会福祉士学会、2013 年 7 月 7 日、盛岡地域交流センター

〔図書〕（計 0 件）

６．研究組織

(1)研究代表者

相山　馨（AIYAMA KAORI）

富山国際大学・子ども育成学部・准教授

研究者番号：10582629

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：